



2019年3月25～29日、スペイン・バスク地方のレリオ市・ビルバオ市

第6回世界家族農業会議 参加レポート

「家族農業の生活を改善するための10年」



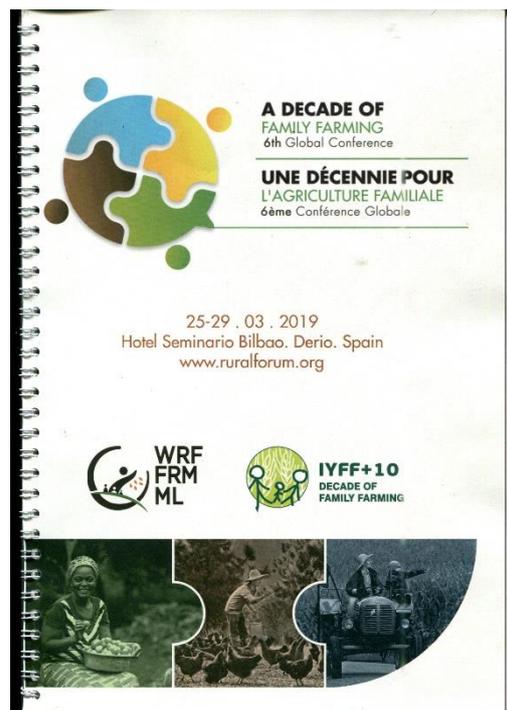
小規模・家族農業ネットワーク・ジャパン
Small and Family Farming Network Japan

タイトル：第 6 回世界家族農業会議「家族農業生産者の生活向上のための 10 年」に参加して
～農民の社会的地位を向上させるには、具体的にどのような事柄があげられるか～農民の視点から

こんにちは=Kaixo！（バスク地方の言葉「Euskara 語」、スペイン語では、Hola）
現地では地元の方たちは喜んで「Kaixo」とあいさつを返してくれました。

私は、小規模・家族農業ネットワーク・ジャパン (SFFNJ) の
農民代表という立場で、子供たち同伴で家族 4 人、
スペイン・ビルバオで開催された会議に行ってきました。
今回「農による新しいシティズンシップ」というテーマを持って、
農民そして市民の個人としての視点でも参加しました。

参加団体に関しては、交換した名刺や資料などで、
帰国後も調べることができると思い、
この会議で出会った人のパーソナリティ「生の声」を聴くこと、
「一期一会」を大切にしました。
団体によって作られるメンバーシップではなく、
個人によって自発的につながるシティズンシップは、
時には国家の枠を超えた国際的な人間関係・市民運動を展開し、
大きな社会や国家を動かすこともあると考えているからです。
この報告書は、短いポルタージュという形式でレポートします。



↑ 会議出席者に配布されたノート



●私はいくつかのワーキング・グループに参加し、
特にアジアの地域の方々とそれぞれ異なる背景を持つ農をめぐる協働等の意見交換をしました。
共通の課題がたくさんある反面、社会的背景が違うことで、互いの理解が難しい部分もありました。
例えば、私が居住し小さな家族農業を営む地域に、都市から移住し新規就農した住民として溶け込む
キッカケは、伝統的なお祭りよりも（地元のお祭りは、交流という良い側面と因習的なマイナスの両

面を持つ)、週末に練習する地元のサッカーチームに参加することで、私が地域に公平性・透明性のあるコンタクトを持てた事例を提言「スポーツによる新規就農者と農村・農民交流」として、ポストイトでグローバルアクションプランのボードに貼りつけました。

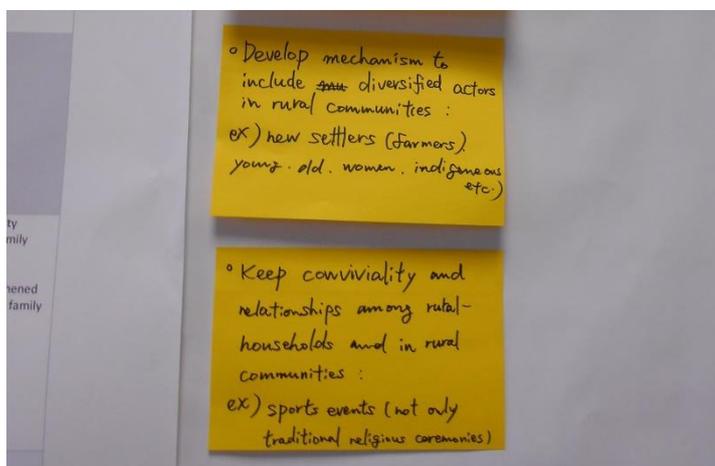
アジアの方々の反応は「何のこと??？」今一歩疑問符が上った気がしましたが、ファシリテーター(Global Engagement Specialist)、IFAD (国際農業開発基金) Torben Nilsson さんは、「面白い提案だ」と言いました。

「個人的に出会うことは非常に大切」

「農民同士の話し合いへの資金援助は IFAD としても考えられる」

「農民の社会的地位を向上させるには、具体的にどのような事柄があげられるか」

参加した皆さんからも、とても熱のこもった共感できる意見や提言を多数聞くことができました。



●議論された内容は全員が集まる会議場で報告されました。

ジャマイカのビア・カンペシーナ (La Via Campesina) の方は、「私たちが直面しているのは、農の現場や農村に若者が少ないということだけではなく、世代継承。トレーニングはあるが、戦略というものがなく、皆外に出て行ってしまう。農村の人々が離れていかないように、一緒に働く、協働していくことが大切」

若い生産者のプレゼンテーションとして、フランス青年農業者協会の方は、「EU の家族農業の定義は、工業的な規模ではなく、人間的な規模であること。農家の社会保証の改善が必要で、地域の価値を守っていくこと。新しい農業、アグロエコロジー (Agroecology) の支援等を通し、農家の自立性を高めていくこと」など、たくさんの報告、提言、質問が上がりました。



●国連「家族農業の10年」のアジェンダに反映されるせっかくの機会なので、フロアからの質問議論の時間に、私は手を挙げて、SFFNJの関根さんに通訳して頂き、下記の発言（提言）をしました。

（発言時間が限られたため、実際は手短な発言でしたが、本レポートでは会場で伝えたかった内容を加筆し、全文掲載しています）

私は日本から農民として参加している斎藤博嗣です。夫婦と子ども2人（小学生）の家族4人で、小さな家族農業を営んでいます。都市部の東京から農村に移住し、新規就農して15年が経ちます。日本の農業の現状は、農業就業人口率2%、食料自給率38%(カロリーベース)、農業従事者の平均年齢は68歳、ということから見ても、日本では農業が大切にされていません。日本が輸入に頼り、皮肉なことに飽食である生活スタイルは、他国の犠牲の上に成り立っており、日本人として非常に反省すべきことである。その結果、日本の開発援助モデルODAなどが、援助ではなく、現地の農民の声を無視して、土地の収奪、水へのアクセス分断、伝統的農村コミュニティの破壊などの被害を与えている。家族農業の10年を通して、日本国内の小規模・家族農業に適切な政策的支援を行い、日本と他国の持続可能な社会形成にこそ税金を使うべきであるという世論を喚起していきたい。

前日のワーキング・グループの中で、ファシリテーターをして下さった Nilsson さんが、《農民の社

会的地位を向上させるには、具体的にどのような事柄があげられるか》と問われていましたね。

私の提言は、農民を社会的存在として尊敬される職業にするために、家族農業の 10 年のアプローチは、FAO や IFAD に留まらず、ユネスコのプログラム ESD (Education for Sustainable Development) 「持続可能な開発のための教育」などと連携し、「家族農業の 10 年」という枠を超え、国連の各セクターを横断するプロジェクトにすること。

例えば、日本では教育改革「新学習指導要領」に「持続可能な社会の創り手」の育成を掲げている。日本で今年 3 月発売されたブックレット『よくわかる 国連「家族農業の 10 年」と「小農の権利宣言」』SFFNJ 編には、この国際会議にも出席されている FAO パートナーシップ・南南協力部長 Marcela Villarreal さんが、『家族農家の知識は、地域におけるアグロエコロジーの革新プロセスを持続し地域の農業遺産システムを維持するためにも不可欠』と文章を寄せて下さっています。まさに農民こそ「持続可能な社会の創り手」の旗手だということを表していると思います。

農民や農村で暮らす人々の再評価のために、ESD プログラムや学校の教科書に SDGs (Sustainable Development Goals) 「持続可能な開発目標」を達成する主要アクターとして、農業という仕事やそこで暮らす農民が尊敬される存在として掲載されるような啓発活動を、家族農業の 10 年のアジェンダに盛り込むことを強く望みます。そして、子ども達にとってファミリー・ファーミングが地球的課題を解決する憧れの仕事になることが、このキャンペーンの成果にならないといけない。

世界的に見ても、農業は「担い手不足」が共通の課題です。農業を仕事とする人が増える具体的なプランを軸にアクションを展開すべきで、結果的に農民が増える政策でなければ、キャンペーンは失敗なので、方向性を見直す必要がある。農業の抱える課題を、農民・農村の問題とするのではなく、同じ時代、同じ地球上で生活する「私たち皆」の問題として考えること。食・健康・教育・水資源・生物多様性、異常気象による地球温暖化等、世界的課題の解決「SDGs の主役が農民」ならば、農業を個人的職業ではなく社会的事業と捉え直す政策が求められる。

誰もが当事者「地球を救う機会を持つ最後の世代」(世界を変革する行動の呼びかけ、SDGs アジェンダ 2030 宣言文より)として、あらゆる人が農業や農村の価値を再発見する根源的なビジョンが必要です。家族農業の 10 年や SDGs をめぐって、国境を越えた農民同士が討議し協力するようになった現在、やがて農民という言葉に代わって、地球と共に生きる農民こそが「新しい地球市民」として、敬意を払われる存在になることを願い、日本の農民としてこの国際会議に参加しました。地球規模の危機を抱えるこの時代に、私は自然に対する畏敬の念と深い内省を持ちたい。永続可能な世界のグランドデザインには、一人ひとりの足元に「土」のある生活設計こそ必要であると考えます。(上記の提言は、Nilsson さん宛てにメールをすれば、国連「家族農業の 10 年」のアジェンダに反映するとお聞きしたので、以下の英文で送信しました)

29 March, 2019 Hirotsugu SAITO

Title: What concrete measures can there be to improve social recognition of farmers?

: A view point from a farmer

~ Reflections on my participation in the VI Global Conference on Family Farming :

A Decade to Improve the Lives of Family Farmers ~

●I wanted to take advantage of the opportunity to have my opinion reflected in the agenda of the UN Decade for Family Farming. I raised my hand when invited for questions and comments from the floor. With the interpretation by Ms. Kae Sekine from Small and Family Farming Network Japan, I expressed the following opinion (recommendation). This is the complete version of my opinion, while at the conference I had to make it concise due to time limitation.

I'm Hirotsugu Saito, a farmer from Japan. My wife and I, together with our two elementary school kids, manage a small scale family farm. It's been 15 years since I moved from Tokyo to rural village and started farming.

I can say that in Japan agriculture is not well respected. It is shown in some data such as farmers per population (2%), calorie-based food self-sufficiency (38%), and average age of farmers (68 years old).

I would say that our lifestyle in Japan should be put on serious review with critical perspective because it is based on sacrifices of people in other countries where we import our food from and because ironically we enjoy food abundance. As a result of our lifestyle, our ODA development models, instead of being their support, ignore voices of local farmers, exploit their land, cut them off from their water sources, and destroy traditional farming communities.

I would like to raise awareness of Japanese citizens that our tax money, instead of for these ODA projects, should be used to support Japanese small and family farmers and to build sustainable society both in Japan and in other countries.

Mr. Torben Nilsson from IFAD facilitated a working group yesterday and asked "What concrete measures can there be to improve social recognition of farmers?"

For the farmers to be respected in the society, I would like to recommend the UN Decade for Family Farming to expand its scope of work to be an inter-sectional / multi-sectional project of the UN, which means the Decade to work with not only FAO and IFAD but also sections such as UNESCO's ESD (Education for Sustainable Development).

In Japan, for example, the "New guideline for education" under ongoing education reform includes "education that fosters leaders to a sustainable society" as one of its objectives. SFFNJ has just published a booklet in March named "Beginners' Guide to UN Decade for Family Farming and the UN Declaration on the Rights of Peasants and Other People Working in Rural Areas". In this booklet, Ms. Marcela Villarreal, the director of the Division of Partnerships and South-South Cooperation wrote "Knowledge accumulated in family farmers is indispensable for maintaining reformative process of local agroecology and maintaining local agricultural legacies". I believe these demonstrate the fact that farmers are the key players among "the leaders to a sustainable society".

Farmers and other people living in rural areas are key players in achieving Sustainable Development Goals (SDGs). Significance of farming and farmers should be recognized with due respects. For this purpose, I would strongly like to see advocacy projects included in the agenda of the UN Decade for Family Farming to promote the inclusion of these descriptions about farmers in ESD programs and school text books. The goal of this campaign should be to make family farming a dream occupation for children who want to solve global issues.

Lack of workforce is a global problem for agriculture sector. We need to implement actions with concrete plans to increase the number of people who take farming as their occupation. If this is not achieved, the campaign can be considered a failure. In that case, we need to reconsider the direction of the campaign. We need to promote the idea that issues agriculture faces are not only the problems of farmers and farming communities but they are problems of “us all” who live on this planet. “The key player for SDGs is the farmers” and they are the ones who contribute in solving global issues such as food, health, education, water resources, biodiversity, and abnormal weather from global warming. If this is true, we need policies in which farming is considered a social enterprise and not simple occupation of individuals.

We need a vision for everyone to recognize the values of farming and farming communities. It is especially critical now because all of us are the actors in the generation that “may be the last to have a chance of saving the planet” (quote from Transforming our world: the 2030 Agenda for Sustainable Development). Farmers across borders have come to discuss and collaborate for issues related to the Decade for Family Farming and the SDGs. Farmers are the ones who really live with the Earth. We deserve to be called “new global citizens” with due respect from society. I came from Japan as a farmer to participate in this international conference hoping to make this last a reality. In the time of global crisis, I’m determined to have a deep veneration for nature and have serious introspection. I believe that what we need in the grand design for sustainable world is life designs that have “soil” under the feet of each and all of us.

(I am sending this recommendation in English as I was told that comments sent to Mr. Torben Nilsson of IFAD would be reflected in the agenda of the UN Decade for Family Farming.)



●私としては、最も会ってお話しを伺いたかった、ビア・カンペシーナの総合コーディネーターで、ジンバブエの Elizabeth Mpofu さんがいらっしやらなかったのが、とても残念でした。

ビア・カンペシーナ国際調整委員会の Joan Brady さんが登壇し、「若者と女性、小規模・家族農業、食の主権いずれの意志決定の課程にも農民自身の参加が必要です。水、土地、種子へのアクセスなど、アグロエコロジーは単なる生産方法ではなく、農家が自然と共に働くイノベーティブな生活様式のことです」とお話しされた後、昨年 12 月に国連総会で採択された『UN Declaration on Rights of Peasants and Other People working in rural areas : 小農と農村で働く人々の権利に関する国連宣言 (小農の権利宣言)』に触れ、「小農を家族農業の中心に、自己決定権、ジェンダー (女性の問題が一番アクションを起こすべき)、多国籍企業による自由貿易支配に対し、ビア・カンペシーナは持続可能な社会に答えを持っている。ビア・カンペシーナは農家によって率いられている。色々な政府や機関が優先されないことを望む。最後に、小農の権利宣言が、この家族農業の 10 年の中で、食の主権、土地への権利など、『人間の声を聴くこと』として使われることを願います」と力強いメッセージを発信していました。

この国際会議の開催地のバスクからは政府の農業、漁業および食糧政策として「変革は農水省だけでできる訳ではありませんが、農業が変われば、教育・健康・福祉などすべてが変わります。小さな存在かもしれないが、社会保障がない人達をそのままにせず、農民が誇りを持てるような国レベルの支援をしていかななくてははいけない。No Farmer, No Food, No Future」と締めくくりました。

●私は家族 4 人で、会議場のエントランスホールで、私の考えを書いた文章と私達の育てた種子を、世界各国から集まった参加者の皆さんに「We are Small Family Farmers from Japan. These are our Home-Grown Seeds. Please sow seeds in your country! "Agricultural Movement for and by All Global Citizens" leading to "Green Life Chain" Let's connect the world!! (私達は日本の小さな家族農家です。これらは私たちの自家採種のタネです。ぜひ、皆さんの国でタネを蒔いて下さい！地球市民皆農による、緑の生命連鎖で、世界をつなぎましょう）」と伝えながらプレゼントしました。五大陸に渡る多くの方々に快く受け取って頂き、栽培や食べ方にとどまらず色々な会話もできました。CFS(世界食糧安全保障委員会)・FAO のドミニカ共和国常任理事会の Mario Arvelo さんは、何と！！日本語で話しかけてくれました。子ども達も「またタネをプレゼントしたい！楽しかった」と言って、種子を通じた国際交流を満喫しました。



会議以外のフロアで、家族農業の 10 年の発議国のコスタリカの男性も日本の活動に興味を示して

下さり、コロンビアの政策立案者と先住民の伝統農法の話をしたり、アフリカのニジェールの研究者からはアフリカの小農のサポートデスクのご案内を頂きました。会議の合間合間も、家族農業生産者の生活向上に関してなど、話は尽きませんでした。このレポートに書ききれない、国際会議で出会った多くのファーマーや、直接お話しできなかったファーマーの皆さんとの再会も楽しみにしています。

●帰国前には、バスで一緒になった、ウグアイから参加されたご夫婦と、世界一貧しい（清貧）元ウグアイ大統領のホセ・ムヒカ&ルシア夫妻の農場の話で盛り上がりました。

ワーキング・グループで一緒した、ベトナムのガーデナー（Vietnam Gardening Association 副議長）、Nguyen Xuan Hong さんとは帰りの飛行機で一緒になり、子ども達が飛行機の出発前のロビーで、その場で作った、折り鶴をプレゼントすると、「ベトナムにも折り紙の文化があるよ」と喜んでくれ、一緒に写真も撮りました。別れ際「家族農業の 10 年をめぐる色々な政策や資金などがあるけれど、末端の農民にその支援が行き届かなければ、このキャンペーンの意味はないから互いにファーマーとして尽力しようね」とお話しして、「今度は、ベトナムや日本で会おう！」と固い握手を交わして、乗り継ぎのパリの空港で別れました。

帰国後、会議で何度もお声をかけて下さった、中米パナマの女性から「日本の農業の現状を会場で聞いて、まったくビックリした」と早速メールがありました。



●出発前には、SFFNJ の賛同者の農家の方々からも「農民の小さな声を届けてきて！」とたくさんのお手紙を頂きました。この 5 月からはじまる、家族農業の 10 年を通して、小規模・家族農業を応援する皆さんとさまざまな場所で、スペイン・ビルバオでの今回の国際会議のことなど、直接意見交換できる日を楽しみにしています！

最後は、バスク語で・・・、「ありがとう：Eskerrik asko」（スペイン語：Gracias）！！

▶第 6 回世界家族農業会議(2019 年 3 月 25～29 日)
in スペイン・バスク地方デリオ市&ビルバオ市
・詳細情報

<https://www.ruralforum.org/es/vi-conferencia/>

<https://twitter.com/worldruralforum>

<https://www.facebook.com/WorldRuralForum/>

<https://www.flickr.com/photos/viconferencewrf/>



UN DECENIO PARA
LA AGRICULTURA FAMILIAR
VI. Conferencia Global

UNE DÉCENNIE POUR
L'AGRICULTURE FAMILIALE
6ème Conférence Globale

A DECADE OF
FAMILY FARMING
6th Global Conference

FAMILIA NEKAZARITZAREN
HAMARKADA
6. Mundu Konferentzia

25-29 . 03 . 2019
Bilbao . Spain
www.ruralforum.org

2019年4月7日

呼びかけ人 愛知学院大学 関根佳恵

2019年3月25～29日にスペインはバスク地方のデリオ市・ビルバオ市を会場に、第6回世界家族農業会議が開催されました。これは4年に一度開催されている国際的なイベントで、今年は「家族農業生産者の生活向上のための10年」を共通テーマとしています。今年5月27～29日にローマで開催される国連「家族農業の10年」(2019～2028年)の開幕イベント前の準備イベントに位置づけられています。各国政府、農業団体、国際機関(FAO、IFAD)、各国の家族農業全国会議、農村開発組織、NGO、協同組合、研究機関を代表して、65か国から約180名が参加しました。各国のメディアも取材に駆けつけました。日本からは小規模・家族農業ネットワーク・ジャパン(SFFNJ)が招待を受け、呼びかけ人の2名が現地に行ってきましたので、概要をご報告致します。

この会議の目的は、(1)国連「家族農業の10年」の公式アジェンダ(行動計画)の策定に貢献すること、(2)同アジェンダ実施のために、国連「家族農業の10年」に参加する新たな主体(各国政府、農業団体、国際機関(FAO、IFAD)、各国の家族農業全国会議、農村開発組織、NGO、協同組合、研究機関、その他の市民団体)とその連携、政策対話を支援すること、(3)家族農業が人類にとって根本的に重要であるという認識を広め、SDGs実現のための重要なツールとして国連「家族農業の10年」を推進すること、(4)SDGsの枠組みにおいて国連「家族農業の10年」のアジェンダ達成に資する公共政策を策定・実施するよう働きかけること、(5)家族農業全国会議やプラットフォームというメカニズムを通じて政策対話を強化すること、(6)知識や情報、経験の共有を通じて家族農業組織を強化すること、です。

これらの目的の下で5日間、テーマごとに設置されたワーキング・グループ(女性・ジェンダー平等、若者・新規就農)、地域ごとに設置されたワーキング・グループ(アジア、アフリカ、ヨーロッパ、南北アメリカ)、言語ごとに設置されたワーキング・グループ(英語、フランス語、スペイン語)に分かれて、各テーマや国連「家族農業の10年」の行動計画について熱い議論が展開されました。参加者の皆さんは熱心に議論するあまり、ときにコーヒー・ブレイク(休憩)も忘れてしまうほどでした。特に農業団体の参加者の積極的な発言と重要な指摘には、進行役の国際機関の職員は終始圧倒されていました。これがグラスルーツ(草の根)のパワーです。私たちも、超高齢化、低自給率、都市化・過疎化等が進む日本の現状や若者の新規就農・農村回帰のハードル等をふまえつつ、これらのワーキング・グループに参加して意見表明してきました。このように、農業団体等の当事者が政策策定のプロセスに直接参加して発言することは、世界的に極めて重要視されており、世界の潮流になっていると言ってよいでしょう。日本でもぜひこの流れを作りたいと思います。

ワーキング・グループで議論された内容は本会議で報告され、国連「家族農業の10年」のアジェンダに反映されます。今年初めに世界全体で実施されたアンケートにもとづいて策定されたこのアジェンダでは、7つの柱(1. 家族農業の強化を可能にする政策環境の構築、2. 農村世帯・コミュニティにおける社会・経済的統合、レジリエンス(回復力)、福祉の向上、3. 農林水産業の持続可能性の促進、4. 家族農業の多面的機能、気候変動緩和、農的生物多様性、環境、文化を守るフードシステムを促進するための家族農業の能力強化、5. 農村における家族農業組織と彼らの知の創造、包括的サービス提供の能力強化、6. 若者の支援と家族農業の世代を超えた持続性の保障、7. 家族農業におけるジェンダー平等と農村女性のリーダーシップを促進)が設置されています。今回の世界会議での議論を反映してアジェンダは最終決定され、それをもとに各国レベルのアジェンダが協議・策定されます。なお、このアジェンダは2年ごとに見直される予定です。

さまざまな議論が繰り広げられた会議の中で特に印象に残っているのは、アジア農民協会からのこんな発言でした。「私には夢があります。その夢とは、2028年の朝、目覚めた子どもが『私、農家になりたい』と願い、農家は『僕は農家であり続けたい』と心から思えるようになっていくことです。」「農家なくして食料なし、未来なし(No Farmer, No Food, No Future)」。国連「家族農業の10年」がいよいよ始まります！